
魔女見習いより、紫眼の魔族へ

尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女見習いより、紫眼の魔族へ

【Nコード】

N5632K

【作者名】

尋

【あらすじ】

@ただ今更新停止中

使える魔法はたった一つ、爆発を起こす「ボムス」だけ。

そんな使えない魔女のバーバラは味方にも見捨てられて死んだはずだった。けれども目覚めた彼女の目の前に居たのは敵であるはずの魔族。

紫眼のそれは彼女に尋ねる。力が欲しいのか、と。

紫眼の魔族デュランと、後に魔王を打倒した伝説の大魔女と称され

る少女バーバラの物語。

雨（前書き）

魔王陛下のヒマ潰しと同じ世界を舞台にしていますが、雰囲気は全く違います

むしろ本編に近いです

陛下の別の面をみたい方はどうぞいらっしやいませ

雨

暗い鉛の空から雨が降ってくる。

真下から見上げた雨粒はまるで静止しているかのようにゆっくりと、点から円になり降り来る。

それは乳白色の細い細い線。

音も無く舞い降りて、ただ静かに熱を奪ってゆく。

暗く鯁えた肉の匂い。

それは灰白色の鋭利な石片が顔を覗かせる大地の上にべったりとタールのように貼り付いている。そしてその硬く踏みしめられた不毛の土の上には幾百幾千もの千切れた肉片。人の物もある。人外の物もある。そのどれもがもはや区分を嫌うように混ざり合い溶け合い、雨に打たれて小さな囁きを呟いていた。

その囁きを聞きながら、バーバラはただ眼で降ってくる雨の描く真つ直ぐな軌跡を眺めていた。

（死ぬ……のかな……）

彼女は朦朧とした頭でそう自覚する。

体は雨に打たれて氷のように冷たく、背中が燃えるように熱い。

痛みは無い。そんなものは既に麻痺してしまっていて、恐怖すら無くしてしまったようだった。

彼女の青い瞳の表面を水滴が滑る。

それすら、もはや彼女にとっては何も感じない。ただひたすらに鈍く重い色の空を見ているだけ。

（死ぬんだ……）

背中を抉られた。

あの黒い魔物に。

それまでは此方の方が優勢だったのに。
あの化け物が現れるまではこちらが勝っていたのに。
それなのに。
それなのに。

彼女の思考は考える端から零れて、毀れて、千々に千切れて途切れて霧散してゆく。

バーバラは冒険者だった。

蝕の日から既に二百年が経過し、一向に終息の気配を見せない魔禍を解決すべく腕に覚えのある者は競って冒険者として魔界へと身を投じているこの時代。バーバラもまた生まれ育った村を飛び出して冒険者としてギルドに登録をした一人だった。そして目的を同じくする他のメンバーとパーティを組み、今まで幾つかの戦闘を潜りぬけてきた。そして今日のこの戦いもまたいつものように多少の苦戦はあれども勝利できると思っていた。

しかし、一頭の魔物の出現が状況を塗り替えた。

まず治癒者^{ヒーラー}が一撃で倒れた。
^{バトルマスター}

斬りかかった戦士の剣は硬い鱗に阻まれて通らなかった。

何かがおかしいとここで誰かが悟った。この魔物はこんな場所に出来来るはずがないAランク以上の強敵だと。成すべき事は一つ。撤退しかない。バーバラもすぐに撤退に加わった。しかし、魔物の死骸で埋まった大地は足場が安定せず、腐肉は彼女の足を飲みこみ、折れて剥き出しになった骨が彼女の衣服を引き止めた。そこへ背中からの一撃。

そして、馬車は彼女の目の前で走り去って行った。
バーバラ以外の全員を乗せて。

（そっか、また捨てられたんだ……）

瞬きもせずに空を見つめたまま、バーバラは小さく息を吐く。笑ったつもりのそれは微かに口の端の筋肉を痙攣させただけで、表情にはならなかった。

（当り前、だよな……こんな、あたし、役立たずだから……）

レベルを上げてても上げても、魔物を何匹倒しても使える魔法はたった一つ。小さな爆発を起こす初級魔法の「ボムス」だけ。こんな魔法^{メイジ}使いで無くても誰でも出来る。その辺の子供だって少し練習すれば使えるものだ。魔法^{メイジ}使いとしての価値なんて無い。

そんなバーバラへのパーティからの眼差しは時を重ねるごとにどんどん冷やかになっていった。あからさまに出て行けと言われた事もある。そして、今回強力な魔物を前について見捨てられたのだ。分かっていた。いつかこうなる事は分かっていた。

バーバラの眼の縁を水が乗り越えて血と泥に汚れた頬を一筋零れ落ちて行った。

「く……しい……」

掠れた声がひび割れたバーバラの唇から零れる。

「悔……い……」

声にならない声。それは酷く歪んで潰れて、彼女自身にも本当に己の声なのか分からない程だった。

その声で弱った喉を震わせて彼女は喘ぐ。

「……に……い……。こ……な……でし……な……」

雨が降ってくる。

ひそひそと。

死体の上に。死人の上に。土の上に。岩の上に。彼女の上に。平等に。

鉛色の空からゆっくりと線を描いて降り来たる。

視界が暗くなってゆく。

彼女は眼を閉じる。

（死にたくないの）

密やかな願いは雨音にかき消され、押し流されてゆく。

雨（後書き）

【作者後記】

。 スピンアウト2作目（原作もちゃんとオリジナルですのでご安心を）
お楽しみいただけましたでしょうか？
次は紫の目のあの人の登場です。誰とは言いませんが同一人物（？）です。

なおこちらの更新は鈍足になるかと思しますのでご了承くださいませ。

作者拝

邂逅（前書き）

登場しますよ。誰とは言わないけど。

邂逅

誰かの気配がした。

けれど、それはあたしの為のものじゃきつと無い。

「……生きてる」

掌を天井から吊り下がっている明かりに透かしてみて、バーバラは小さく呟いた。

のどが痛い。まだ声は掠れている。けれどもその痛みはまだ生きている事の証拠だ。

背中に当たるのは固い寝台とシーツの感触。そして包帯。誰かが彼女を助け出して治療したというのだろうか。しかし何故。どうやって。

バーバラは赤い髪を抑えつつ、寝台に肘をついて上体を起こし周囲の様子を確認した。

そこは簡素な部屋だった。

寝台の脇には背凭れの無い木製の丸椅子が二つ。片方には水の入った盥が乗せられており、そこに医療用のはさみが沈んでいた。他に家具の類は一切無い。

すぐ正面、歩いて数歩の所には木製のドア。その向こうから微かに何か大勢の気配が感じられる。部屋の狭さや構造、気配などから推察するにどうやら此処は何処かの営巣の一室らしかった。

「……」

バーバラは視線を自分の体に落とす。

胸元には清潔な白い包帯が巻かれているが、傷は既にふさがっているのか痛みはまるで無い。

掌を当てると、ザラザラとした感触越しにどくどくと脈打つ己の鼓動が感じられた。じんわりと暖かい。

「あたし、生きてる……」

漸く湧いてきた生への実感にバーバラの口からぼろりと言葉が零れた。

理由など分からないが生きている。その事がバーバラには無性に嬉しくて。さみしくて。切なくて。彼女はぐつと奥歯を噛みしめて感情の高ぶりを押し殺す。そして目を閉じて大きく深呼吸する。狭い部屋の空気は今まで吸ったどんな空気よりも美味しいような気がした。

と、不意に部屋の外の空気が変化した。

行き来していた気配がまるで雷にでも打たれたかのように硬直し、眼に見えぬ何かに怯えているかのような不自然な沈黙。緊張感。ピリピリと全身の毛孔がさくれ立つような何とも言えない威圧感が外の空間に訪れていた。それを感じ取ったバーバラもまた無意識に身を竦め杖を捜して辺りを手探りする。しかし、どこにも見当たらない。焦りが彼女の背筋をチクチクと刺す。

（来る）

何故かは分からないがバーバラにはその確信があった。

今外の空気を一変させた「何か」はこの部屋を目指してやって来ているという天啓に近い確信が彼女にはあった。しかしそれに備えられる為の時間はあまりに少ない。

カツカツという足音がする。

それは彼女の部屋の前で止まった。

「お疲れ様です」

誰か女の声。

「御苦労」

それに応えた声の美しさにバーバラは一瞬状況を忘れて聞き惚れた。

まろやかで柔らかな、ただの短い単語がまるで歌の一節かのように美しく響くようなアルトの声。こんな声はどんな吟遊詩人でも聞いた事が無い。

その声に思考能力を奪われたかのように茫然と寝台に座りこんでいると、扉が、開いた。

これが、後に大魔女と称されるバーバラと紫眼のデュランの最初の出会いだった。

紫眼

紫の目は呪縛の色。

ドアを開けて入ってきたのは酷く背の高い男だった。

顔は中性的な、そして左右対称に整った顔だったがその立ち振る舞いが、雰囲気相手が「彼」だと告げていた。片方の腰には剣。片腕には何か荷を抱え、纏うのは漆黒の軍用コート。足元は底の厚いブーツ。手には手袋。軍人の出で立ち。

耳につけた黒い大量のドロップタイプのピアスが触れ合い、歩調に合わせてシャランと小さく鈴のような音を立てた。

「……」

眼が合う。

時が、息が止まるかと思った。

相手の目は鮮やかな紫色をしていた。それは人には許されぬ禁色。射抜くように強い眼差しにバーバラは一度ごとりと唾を飲み込み、掠れた声で呻く。

「魔族……」

「そうだ」

バーバラの眩きを拾って相手は頷いた。そっけない仕草だった。「意識が戻ったようだな、娘……」

「何故、魔族があたしを……殺さないのか」

「死にたくないのではなかったのか」

腕に持っていた荷物を意外にも丁寧な手つきで取ってバーバラの膝の上に置きながら相手の人型の魔族は何と言う感動も込めずにそう言った。それは質問ですらなかったようだ、それでもバーバラの言葉を奪うには十分だった。

膝の上の硬い生地には爪を立てるようにして握りしめ、彼女は呟く。

「……死にたく、無い」

「ならば生きている事を喜べ」

淡々とした相手の声にバーバラは黙って膝の上に置かれたものを見る。

それは意識が途切れる直前まで着ていたはずの彼女の服だった。泥と血にまみれていたはずのそれはきれいに洗濯されて皺が伸ばされ、破れた所も補修されているようだった。ここでバーバラは包帯の上にガウン一枚と言う己の姿を自覚して羞恥に顔を赤くする。

「安心しろ」

そんな彼女の葛藤を見抜いてか、涼しげな声が頭上から降ってくる。

「お前の着替えは女性隊士にさせている。私はそれを預かって届けに来たまでだ」

「……。一応、お礼……言っておく。ありがとう」

魔族相手に言うなど妙だとは思ったが、バーバラはそれでも小さな声でそう告げた。

それに対した感銘を受けた様子も無く、相手はやはり小さく頷いただけで黙って腕を組んだ。

沈黙。

見られているという意識が彼女の体を強張らせる。

「今後の希望を聞こう」

暫くして掛けられたのは意外な言葉だった。

それにバーバラははっとして顔を上げる。

見上げた相手は相変わらず冴え冴えと冷たい美貌で彼女を見下ろ

しているだけだった。紫色の瞳からは何の感情も読みとれない。暖かくも無く冷たくも無いそれはただ深い色をしている。まるで何もかも飲み込みそうなほどに。

「き、ぼう……」

「物質界の端まで隊士に送らせても構わん。三日分の水と食料程度なら分けてやろう」

「物質界……」

「帰りたくは無いか」

「帰る」

馬鹿のように相手の言葉を繰り返したバーバラに、相手が微かに眉を顰める。

しかし、バーバラは相手の提案にも喜びの色を見せるでもなくただ当惑していた。そしてやがて、口を開く。

「帰る場所なんて……あたしには無いから」

「……」

「生きていても……役に立たないから……」

「……」

何故魔族を相手にこんな事を言ったのか分からない。けれどもバーバラは話す事を止められなかった。

「生まれ故郷は捨ててきたし、仲間にはさっき捨てられたし……行きたい場所なんて……無いし……。だから、希望とか言われても……」

「……」

「そうか」

応える声には何の色も無い。

「ならば数日後に去れ」

「え？」

「傷が癒えるまでの滞在を認める。だがそれ以上の滞在は許可しない。以上だ」

「ま——」

踵を返した相手へ手を伸ばしかけ、バーバラは混乱する。

引き止めてこの相手に何を期待するのか。泣いて懇願でもするのか。相手は魔族だと言うのに。

白い顔が微かに此方の方を向き、紫の瞳が彼女を睥睨する。

「何だ」

「あ、あの……名前」

咄嗟に思いついた言葉を吐き出したバーバラを相手の感情の読めない眼が見下ろす。

「ディアヴォロス・デュラン」

告げ、相手は付け加える。

「人間の敵。第五部混成隊総括だ」

異境

短い顔合わせの後、バーバラはまた崩れるように眠りに落ちた。その後も何度か浅い覚醒と深い眠りを繰り返し、やっととはつきりと意識が覚醒したのはそれからまた二日が経過した後だった。

空腹を覚え、彼女はベッドの上で座り込んだままのろろと近くの椅子の上にきちんと畳んで置いてあった自分の服に手を伸ばした。気付けば包帯は既に体から外され、指で背中を探ってみてもうっすらと凹凸が感じられるだけで痛みはもう無かった。傷の方は殆ど治ったと考えて構わないようだった。

久しぶりに身に纏う自分の服はガサガサと乾いて、まるで知らない誰かの服のようだ。

つま先を伸ばしてベッドの下から木の靴を引っ張り出し、履く。

ドアを押して外に出ると、茶色の髪の恰幅の良い女性と目があつた。

「あら、おはよう」

「お、はよう……ございます……」

「あんた、そこに入ってた怪我してた子だね。おいで、食堂の場所を教えてやるよ」

「食堂……」

「何か食べられそうかい？」

ごく当たり前のようにつけられてくる言葉に戸惑いつつ、バーバラは小さく頷く。

それに彼女の母親ぐらいの年らしき女は笑顔で頷いて、「ついで」と歩き始めた。

それに少し遅れて、バーバラも後を追う。

「あの、ここは……あなたは、魔物じゃ、ないの？」

「あたしは人間さね。ナンシーって呼んでおくれ」

「バーバラです」

「バーバラかい。それじゃバーバラ、まずもうちょっとしゃきつと背を伸ばしてお歩きよ」

「あ、はい……」

バシツと腰を叩かれて慌てて背筋を伸ばし、しかしバーバラはすぐに不安げな顔に戻って周囲を見回す。

移動するにつれて次第に周囲には人の数が増えてきている。黒い、あの紫眼の魔族が来ていたものと同じ黒い軍服姿の男や女が居るかと思えば、まるで普通の町人のような作業着姿の男、木綿の服を着てヤギを追っている子供も居る。

まるで、どこかの集落のようだ。

どの相手を見てもまるで人間にしか見えない。

ここまで完璧な人型をとれるとすれば、全員が高位の、Bランク以上の魔族と言う事になるのだが。

しかし、見ている感じはまるで普通の人間のようで。

「ナンシーさん……ここは、何なんですか？」

「ここかい？　ここは第五の営巣さ。今はこんな呑気な状態だけだね」

「第五……」

「……ああ、お嬢ちゃんはお客だったね」

ナンシーは前かけで手を拭きながら、バーバラを見下ろして笑った。どこか憐れむような笑みだった。

「ここは、あんたたちの言う魔王軍の第五混成部隊……人間と魔族の混交部隊さ」

「人間と魔族……」

周囲を見回し、バーバラは茫然と呟く。

「本当にあつたんだ……」

人間が魔族の中に混ざって戦っていると言う噂はバーバラも聞いていた。

魔族との取引によって強い力や永遠の若さを手に入れる代わりに魂を売り渡し、魔族の手先となって人々を襲う最悪の集団。人間世界の地理や情勢、生活習慣を知りつくしている同種による襲撃は時に魔族のみで構成されている軍勢よりも大きな被害をもたらすと言う。その第五混成部隊、通称「裏切り者」の営巣がここだということか。

この人の良さそうなナンシーという女性もまた、人間を裏切り魔族に魂を売ったのか。

嫌悪感をあらわに後ずさったバーバラに、しかしナンシーは軽く肩を竦めただけだった。

「本当さ。お陰であたしもあいつらも生きているんだよ。さ、まずは食事をお食べ」

「いない……」

食堂と思しき部屋へ腕を引いたナンシーの腕を振り払い、バーバラは嫌悪感を隠さずに歯を食いしほる。

「人殺しの裏切り者なんかと一緒に食事したくない」

賑やかな食堂にその声は思った以上に良く響いた。

それに数名が物珍しげな視線をこちらに投げ、数人は興味を失ったのかすぐに食事に戻る。不愉快そうな視線を投げかける者も中には居たが、殆どの者が気にしていない。「またかよ」という小さい笑い声にバーバラの顔が羞恥に赤く染まった。

「同じ人間なのに、魔族なんかに魂を売って……そんな奴らと一緒に食事なんてイヤ」

「食事を食べなきゃ死んじまうよ」

「人殺しの食事なんて、食べないで死んだ方がマシよ」

「そうか」

心臓にずしりとのしかかるような深い声。

気付けば食堂に居た全員が立ち上がって胸に手を当て、頭を下げ

ていた。

しかしそんなものを見なくても分かる。

このどうしようもない、自分のみじめさを骨の髄まで教え込むかのような圧倒的な存在感。

「お疲れ様です、隊長」

「御苦労、皆食事をつづけてくれ」

空気が動く。

背後から音も無く黒い姿が通り過ぎた瞬間、バーバラの体は勝手に膝から崩れて床に座り込んでいた。

それを、感情のこもらない紫の目が見下ろす。

「通路で座るな。通行の邪魔だ」

「魔族の癖に……」

その顔を見上げ、かろうじてそれだけ呟いたバーバラに黒衣の魔族は端正な顔を崩さずにただ一言、「それがどうした」と返した。

その言葉に彼女は一瞬絶句する。

「どうした、って……」

「お前は人間で、私は魔族だ。それがどうした」

「お前が！」

その顔を指し、バーバラは気圧されてたまるかと声を張り上げる。

「お前が……他の人たちを騙して、人間同士で争わせてる訳？」

「指揮を取っているのは私だ」

「最低……やっぱ魔族なんて、魔族なんて人間の敵……おぞましい化け物で……」

「お前の言葉は何の意味も無い」

静かな声にバーバラは雷に打たれたように身を竦める。

相手の顔には相変わらず何の表情も浮かんでいない。瞬きしない紫の目に押しつぶされそうで、バーバラは無意識に自分の体を腕で抱きしめる。

「魔族は人間の敵、おぞましい化け物……それは、お前の言葉か？」
「……」

「借り物の言葉で語るな」

淡々とした声。視線が外れる。

「否定するのは構わん。だが語るならお前の言葉を語れ……その時は聞いてやる」

「……何、それ」

「お前の言葉はうつろだ」

聞く価値も無い。

つかつかと長い黒髪を左右に揺らしながら立ち去る魔族の後ろ姿に、バーバラは言い返す言葉を見つけられず、ただ憎しみをこめてその背中を睨みつけるしかなかった。

孤独（前書き）

久々に書き足し

孤独

バーバラがやっと我に返った頃には食堂は既に殆ど人が残っていなかった。

食事を終えて出てゆく黒い軍服に身を包んだ彼らの憐れむような、嘲るような、何処か同情するような視線がバーバラには目障りで、不可解だった。

憐みを受けるべきなのは、嘲りを受けるべきなのは、魔物の手先となつて墮した彼らであるべきなのに、何故そんな者たちにあんな目で見られなければならないのだろうか。

まるで、彼女こそが迷子の、力のない、哀れな愚か者であるかのような視線で。

「ほら」

声をかけられ、それが自分への物だと遅れて認識し、バーバラは見つめていた自分の指先から視線をのろのろと上げる。

上げた先にあつたのは人の良さそうなまろい赤ら顔の女の顔——その顔に彼女は相手の名前を思い出す。

「ナンシー……さん……？」

「ぼんやりいつまでも座ってるんじゃないよ。怪我人なんだから、体を冷やしちゃダメじゃないか」

「……」

「……。あたしの手を取るのが嫌かい？ バーバラ」
顔を背けたバーバラに、手を差し伸べていたナンシーは小さく笑む。

その笑顔に、バーバラの瞳は戸惑うように揺れる。

「あ、あなたは……どうしてそんな風に笑うの？」

「そんなふうって、どんなふうにだい？」

「だ、だって！ だって、あたしはさつき……あんな風にナンシー

さんの事否定して、拒絶したばつかなのに……こんな風に言われて悔しくないの？ 嫌でしょ？ 憎いでしょ、あたしが」

「あんたねえ……あたしがあんたより幾つ年上だと思ってんだい」
ピン、と混乱するバーバラの額を指先で弾いて、ナンシーは豊かな胸の前で腕を組む。

「そんな言葉にいちいち腹立ったりなんかしやしないよ」

「あ、あたしが子供だからだっていうの……？」

「それもあるよ。あんたはまだ子供さ。一丁前に世間の事が分かったつもりになってるけど、まだまだあたしから見りゃクチバシの黄色いひよっ子さ」

ふん、と鼻を鳴らしてナンシーは笑う。

「それに怪我人だ。あんたは、あたしが怪我して傷ついて弱ってる子がちよつとぐらい駄々捏ねたぐらいで見捨てるような狭量な女だとしても言いたいのかい？」

「い、いえ……」

ポンポン飛んでくる言葉に慌ててバーバラが首を強く横に振って否定すると、ナンシーはそれまでのこわい表情が嘘だったかのようになつこりと満面の笑みを浮かべた。

「ほら、あんたは良い子じゃないか」

「え？」

「悪いと思ったら謝れる。ちよつと捻くれちまってるけど良い子さ。あんたは。そんな子にどうして冷たく出来るね？」

「あたし、良い子なんかじゃ……それに、ここの事だって……」

「別に誰も仲間に入れとは言つて無えじゃん」
「ひっ！」

後ろから突然肩に手を置かれ、バーバラは一度ビクリと身を震わせて振り返る。

そこに居たのは黒い軍服に橙色の髪をした若い男だった。

どこか悪ガキじみた深紅の吊りあがり気味の瞳が面白そうにバーバラの事を見つめている。

「何何？ こいつか？ うちの隊長殿に喧嘩うって泣きべそかいたガキってのは」

「泣いてなんか無いわよ！」

「へー、でも泣きそうな顔してんじゃん」

「おやめロツソ」

ナンシーの言葉にしかし、ロツソと呼ばれた男はにんまりと笑っただけで肩に置いた手を離そうとはせず、逆にじろじろと頭の天辺から爪先まで眺めまわし、最後にバーバラの胸を見て「男？」と呟いた。

それにカアツとバーバラの顔が赤くなる。

「だ、誰が男だ！ あたしは女だ！」

「へー……そりや残念な結果で」

「何処見て言つてんのよ！」

「どこつてそりやあ、そこ？」

遠慮なしに胸元を指さしたロツソの頭を、スパーンと平手ではたたいたのはナンシーだった。

「おやめと言つただろ、ロツソ！」

「痛つてえ……あにすんだよ、この暴力ババア！」

「おだまり」

ピシヤリとその言葉を遮り、ナンシーはついでにロツソの襟首を掴んでバーバラから引き剥がす。

同時にジロリとロツソの方を横目で睨み、低い声でこう告げた。

「この事は隊長さんに報告しとくからね」

「げえっ」

『隊長』の言葉に今までにやけ面だったロツソの顔が強張る。

「そりやねえよ。勘弁してくれよナンシーさん」

「何だい、暴力ババアじゃなかったのかい？」

「いや、そりやかるーい冗談っつーか、ほら、親愛の表れっつーか」

「ふん、寝言は寝て言うんだね。ほら、バーバラいつまで床に座つてんだい。お立ちよ」

「あ、はい」

目の前で交わされる応酬にすっかり毒気を抜かれ、バーバラは素直に言われるまま服に着いた土埃を払って立ち上がった。

今まで座っていたせいで足は冷たく冷え、上手く動かないような気がする。

よろけたところをしっかりと支えてくれたのはナンシーの肉厚な手だった。

「大丈夫かい？」

「はい……平気です」

「さ、座ってスープをお飲み。何をするにもまずは体を治す事が先決さね。誰が育てたって、その食物が尊い事に変わりはない。そうじゃないかい？」

「……」

支えられて椅子に座ると、目の前にゴトリと木のスープ皿が置かれた。

立ち昇る湯気の香りに、忘れていた食欲を思い出す。

とろりとしたジャガイモのスープ。

「ほら、食堂がいつまでも閉められなくて困ってる連中も居るんだよ。さっさとお食べ」

「はい」

スプーンを取った時に不意に泣きそうになり、バーバラは黙ってそれを口に運んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5632k/>

魔女見習いより、紫眼の魔族へ

2010年11月19日11時07分発行